

詩篇46・2-8の文学的構造について

津村 俊夫

最近、アロンゾ・シェーケルは、「聖書の文学的研究の解釈学的諸問題」と題する論文において、「読者と解釈者のなすべき仕事は、本文の輪郭とともにそのすべての重要な諸特徴を認め説明することである」と述べたあとで、実際的な提案の一つとして、「ヘブル語の文法を学ぶだけで満足するのではなく、その文体論と詩学をも含めて学ぶべき」ことを挙げている^②。従来の歴史的・批評的（通時的）研究が、本文の文学的前史と背景的状况（生活の座）の解明をめざし、個々の文学形態を軽視して、総称的な形態あるいは文学類型に一般化していく傾向を持っていたのに対して、アロンゾ・シェーケルが共時的観点に立つて個々の形態にもっと注目すべきであることを強調するのは正しいと思われる。この意味で、「文学類型的に……型やぶり」である詩篇46について、ヘブル語の文体と詩形の分析によって、その全体の構造を、形式とその機能および内容との関係に注目しつつ論じることが、現代的意義を持つものであると思われる^④。

詩篇46の構造理解において最も中心的な問題は、4節の後に8、12節のような畳句の存在を認めるべきであるか否かという点であろう。元来そこにあつた畳句が、書記による見落としの結果、偶然脱落したのであると想定して、その畳句を復元する立場が最近まで学界の定説であつた^⑤。その復元によって、第一段落（2-4節）が他の二段落（5-8節、9-12節）と同じ長さになり、全体のシンメトリーが保たれると考えられている。もう一つの要因は、3節と4節の動詞形の相違（すなわち、前置詞+不定詞とカル形・未完了形）にある。伝統的には、4節の動詞は譲歩を表わし、3節の前置詞+不定詞を受け継いでいると考えられてきた^⑥。しかし、畳句の復元によって、4節を条件節として畳句をその帰結と考える可能性が提案された^⑦。他の者は、畳句を復元するしないに関わらず、4節を独立文と考える^⑧。

ドウムとマクラレンは、2-3節と4節+畳句との間に「逆並行法」*inverted parallelism* を認め、「前者は神にある安全さを最初に表現し、周囲のわざわいを第二に表わしている。後者は、同じ二つの主題を逆の順序で扱っている」と考える。同様に、ヴァイザーは、畳句による神への証言が内容的にこの文脈にふさわしいと考える^⑩。他方、キッテルは、2-4節が聖歌隊によって歌われ、畳句が会衆によって応唱されたと説明する^⑪。この場合は、4節はむしろ2-3節と結びつけられることになる。このように、4節をその文脈においてどのように解釈するかが、この詩篇の前半の構造理解に大きく関わっている。

畳句を復元する右のような立場に対して、M・ヴァイスは近年、その本文修正（この場合、付加）の主観性を批判し、4節の後に畳句を復元することを積極的に否定した。彼は、従来の三段落構成を退けて、全く新しい独自の構造分析を提唱している^⑫。ユンカーおよび左近は、ヴァイスの分析を基本的に支持する^⑬。関根は、4節を「前につづくとともに後につづく独立の節」と見ている。クリネツキーは、畳句を復元した後にも三つの段落に長さの相違が存在することに注目して、その復元が詩のシンメトリーの回復には役立たない点を指摘している^⑭。また、ゴールディングは、最近、4節の後に畳句が偶然省かれたとは信じ難いと表明している^⑮。ダフドも、異なる理由にもとづいてではあるが、畳句の復元をさけている^⑯。

このような状況にあって、詩篇46の全体的な構造を、ヘブル語の文体的特徴に注目しつつもう一度詳しく論じる必要があると思われる。まず、2—8節の文学的構造を把握するために、次のような順序に従って論じていくことにする。

- ① 3節後半と4節との関係
- ② 3—4節と7節との関係
- ③ 3節後半と4節と5節との関係
- ④ 5節と6節との関係
- ⑤ 3—4節と5—6節と7節との関係
- ⑥ 2節と6節との関係
- ⑦ 2—8節全体の文学的構造

① 3節後半と4節との関係	*	*	
3a) 'alkén ló-nírá(?)	(2)		
b) behámir [áres]	(2)	……	7d
c) ūbemót hārím	(2)		
d) baléḇ yammím	(2)		
4a) yehémú yehmarú mémáw	(3)		
b) yir 'ású-harím baḡa'awátó	(3)		} 7 abc

3節は、4—4という韻律パターンをもつ二行詩か、2—2—2—2というパターンをもつ四行詩のいずれかに分析することが可能である。しかし、後者の方が、7節との関係においてふさわしい(後述)だけでなく、3cと3dとの間に見られる頭韻 (Bamót—baléḇ) と脚韻 (hārím—yammím) の現象によっても支持されよう。3節後半(3c—3d)と4節とは、韻律構成においてだけでなく、すでに注目したように、動詞形も異なっている。しかしながら、両者は、内容的に対峙していると同時に、形式的にも密接に結びついている。すなわち、3節の「山々」(hārím) — 「海」(yammím) と4節の「水」(mémáw) — 「山々」(hārím) の間には、ヴァイスが指摘するように、キアスムス (ABB'A') が認められる。^② このように、4節を独立節と考えることが出来るとしても、それは、3節後半を受け継いでいる。

② 3—4節と7節との関係

7a) hāmú góyim	(2)		
b) máúḏ mamlakót	(2)	3cd4ab	
c) náḥan baqóló	(2)		
d) tāmúḡ [áres]	(2)……	3b	

7節が3—4節と並行関係にあることは、キングステンブルクらによって、古くから認められていた。このことは、3—4節の「地」(áres) — 「夢」(mót) — 「山々」(yehémú) と7節の「山々」(hāmú) — 「海」(máúḏ) — 「地」(áres) とがキアスムス (ABCC'B'A') の関係にあることからも認められるべきである。^③

この7節は、二行詩とも四行詩とも分析することが可能である。ヴァイスは、それを二行詩と考え、後半を、神頭現の場における「Aktion」(7c) と「Reaktion」(7d) とする。^④ 彼によれば、「7c」は裁きと処罰が問題になっている

のではなく、叫びと応答が問題になっている^③。しかしながら、7節は、四行詩と考える方がこの詩全体の構造理解にふさわしいと思われる。第一に、7aと7bとの完全な並行法がよりよく説明される。第二に、7aと7bと7cとは、動詞が完了形であるのに対して、7dは未完了形が用いられている。第三に、7dは、内容的に3bと並行関係にあるだけでなく、「地」(‘āres) は、この詩の前半(2—8節)ではこの二ヶ所のみ表われている鍵語^④である。従って、3c—4bは7a—7cと対応すると見なすことができる。もし、右の説明が正しければ、7cは7a—7bと密接に関わっていると考えるべきである。

この「スビロニアの嵐の神アダドに関するアッカド語の表現に注目してみたい。

sā ina pišu “at whose voice

huršāni inšū the mountains rock

isabu’u tamâte the seas swell.”

(The Kurba’il Statue of Shalmaneser III, 1.6)^⑤

アダドの声、すなわち雷鳴は、ウガリト神話では、バアルが声を発する(yin qih)とく表現で記されている^⑥。詩篇46・7cのnāṭān baqōlōは、言語的にはウガリト語の表現に明らかに対応している。この詩篇と右のアッカド語の表現とを比較すれば、次のことが明らかである。第一に、詩篇46の「立ち騒ぐ」(7a)―「揺らぐ」(7b)―「声」(7c)という順序が、後者はさきほど逆に表われる(pišu—inšū—isabu’u)。第二に、二つの動詞の主語は、アッカド語のテクストにおいて「山々」(huršāni)と「海」(tamâte)^⑦であるが、これは、詩篇46・7a—7cに対応する3c—4bにおける二つの動詞‘mōt u yehēmūの主語「山々」と「海の水」に相当する。こうした事実は、もちろん、両テクストの依存関係を証明するものではない。ただ、右のことから例証される点は、ちょうどアダドの声によって

「山々が揺れ動き海が騒ぐ」(ヤウ)に、詩篇46・7cの「神が御声を発せられる」ことが、7a—7bの「国々が立ち騒ぎ、諸王国が揺れ動く」様と深く関わっているであろうということである。もちろん、7cが7dと文脈的に関連していることは否定するべきではない。それゆえ、7cは、前に続くとともに後にも続いていると考えることが出来る。以上のことから、7dは、アダドの行為の場合のように、ヤハウェによる破壊的な行為、すなわち「裁きと処罰」の結果を記していると考えられる方が妥当である。

7a—7cと3c—4bとの対応関係についてはすでに注目したが、前者は、構造的には、4a—4bとより密接に並行している。両者を再び記す。

4a) yehēmū yehmarū mēmāw (3) [A b]

b) yir’āsū-harīm baga’āwātō (3) [a’ b’ c’]

7a) hāmū gōyim (2) [a b]

b) mātū mamlakōt (2) [a’ b’]

c) nāṭān baqōlō (2) [C]

4節は次のような並行法を構成している^⑧。

A (yehēmū yehmarū) b (mēmāw) // a’ (yir’āsū) b’ (harīm) c’ (baga’āwātō). 4aと4bの二つの動詞が asyndeton

で結び合わせられ、4bの動詞(a’)と対応している。これは、c’に対応する要素が省略(ellipsis)をされているためだ。

「安定変形」(Ballast variant)に属するaがAに拡大されたのである。他方、7a—7cは、a (hāmū) b (gōyim) // a’ (mātū) b’ (mamlakōt) // C (nāṭān baqōlō). 4aと4bの二つの動詞(aとb)は、4節のAとa

にそれぞれ対応している。^⑩ しかも、動詞 *mwit yis* とは、3c—4b ともに「山々」を主語として持ち、詩篇60・4では逆の順序で表われる、同義的な「並行対語」^⑪ であるので、4節と7節(a—c)における二組の動詞は、同じ二つの活動を同一順序で記していることになる。

また、4節のc (*baga'awátó*) と7節のc (*na'án baqóló*) とは、一見、全く無関係に見えるが、両者は、それぞれの文脈(並行法)において類似した役割を果たしているように思われる。前者では、「その水かさが増す」ことによって山々が揺れ動くことと記されているが、後者では、すでに注目したように、神が「御声を発せられる」ことが「国々が立ち騒ぎ、諸方の王国が揺らぐ」ことに深く結びついている。すなわち、歴史の裁き手としてのヤハウェによる破壊的行為が、海の水の破壊的行為と対比されているのである。7節において、政治的状况が、自然現象を記述する言語によって比喩的に表現されているのを見るのであるが、7cの言語の背後にあると想定しうる自然現象と、4bの言語の背後にある自然現象は、意義深くも同一ではない。後者は、「海」の活動に関するものであるのに対して、前者では、通常、嵐の神に対して用いられる表現が見られる。しかも注目すべきことは、この詩篇には、「海」の神と「嵐」の神(ウガリト神話ではヤムとバル)との戦いという、いわゆる *Chaos-kampf* のモチーフは、グンケル以来多くの学者が想定するにもかかわらず、全く認められない。^⑫ この詩篇の強調点は、「海」と「山々」あるいは「地」(3b)との間の緊張関係と、ヤハウェと諸国あるいは「地」(7c)との間の対立関係にあるのである。それゆえ、4節の「海」と7節の「彼(神)」は、ともにある種の「破壊的」な力として理解することができよう。すなわち、詩篇46には、二つの対立する力の戦いが記述されているのではなく、二つの「破壊的」な力、すなわち「海」と裁き手であり処罰者である「神」による二つの「破壊」(destruction)の業が、中心的モチーフとして描かれているのである。^⑬

⑩ c節後半と4節と5節との関係

- | | |
|------------------------------------|-----|
| 3c) <i>áhamót harím</i> | (2) |
| d) <i>baléþ yammím</i> | (2) |
| 4a) <i>yehémú yehmarú mémáw</i> | (3) |
| b) <i>yir'ású-harím baga'awátó</i> | (3) |
| 5a) <i>nahár pelagáw yesammehú</i> | (3) |
| b) <i>'ir'elohím</i> | (2) |
| c) <i>qadós miskane' elyón</i> | (3) |

ヴァイスは、5aの *nahár* が4bの *baga'awátó* に密接に連結されていることに注目して、次のように言っている。「もしも、元来4節と5節の間に置句があったのであれば、*nahár* が(5節の)はじめに来ていることは全く無意味であろう。」それから、彼は、*baga'awátó* と *nahár* とを対比して、前者を「海のとどろきどうなり」を思い出させるものと説明し、後者を「バラダイスの川」との関連において考える。^⑭ 結論として、ヴァイスは、4節に「恐れとおののき」を、5節に「安息と平和」を見る。このような、4節と5節との間の「対比」(contrast)は、少なからずの学者によって認められて来た。^⑮ この対立現象は、4節のあとに置句が復元されたとしても存続しうると、ヴァンケは考える。^⑯ しかし、それとは逆に、置句の復元を認めるマクラーレンは、もし置句がないのなら、「第二段落は、強い印象を与える突然さをもってはじまるので、さらに鮮やかに劇的である」とさえ言う。4節と5節の構造的関係は、いま一度、詩の形式と内容の分析によってさらに明確にされる必要がある。

まず、5aの最初の二語間の関係は、様々に理解されている。伝統的には、「川がある。その流れは……」(新改訳、

協会訳、KJV、RSV他)等と訳されてきた。関根は「一つの川、そのいくつかの流れ」と訳している。しかし、左近は、エンカーに従って、5節全体を「至高者のみ住居の至聖所は水の流れ、その支流は神の都を喜ばせる」と訳す。また、ヴァイスは、すでに注目したように、「川」とその直前の *baga'awātā* との対立関係を見る。

我々は、5節と構造的に対応しているのは、4節だけではなく3c-4b節であると考えたい。すなわち、両方の部分の鍵語に注目すると、3c-4bでは、すでに見たように、「山々」―「海」―「その水」―「山々」というキヤスムス(A B B' A')の形式をもっているのに対して、他方、5節では「川」―「その流れ」―「神の都」―「至聖所」^③とどう語順(A A' B B)にならざるを得ない。したがって、前者の「海」―「その水」が、後者の「川」―「その流れ」と対比されていることが明確である。その「海」と「川」の対語は、ウガリト神話では「君主『海』」(*zbl ym*)と「裁判官『川』」(*tpti nhr*)とどう、豊穡神バアルに敵対する同一の神を表現している。旧約聖書では、例えばヨナ2・4 (*yammīm wānāhār*)で「海」と「川」がともに、「宇宙的大海」(*cosmic ocean*)を表わす同義的な語として用いられている^④。すなわち「海」と「川」は、ウガリト語とヘブル語とに共通の「並行対語」であって、ほとんどの場合、両者は同義的文脈に現われる。しかしながら、注目すべきことに、詩篇46の著者は、この「定型的」(*formulaic*)な対語を「対比」(*contrast*)という詩的技巧によって意図的に対立させているのである。

さらに、5節と4節の対立は、海の「水」の活動、すなわち「立ち騒ぎ、あわだつ」(*yehēmū yehmarū*)、川の「流れ」の活動、すなわち「喜ばせる」(*yesamnehū*)、こととの対比によって提示されている。我々は、この二組の動詞の共通の背後に、「ぶどう酒」の二重のイメージを想定できるのではないかと思う。すなわち、4aでは、ぶどう汁が発酵して「立ち騒ぎ、あわだつ」イメージを、他方5aでは、ぶどう酒が人の心を「喜ばせる」イメージをその表現の背後に見出すことが出来るのではないだろうか^⑤。

さて、語根 *hmr* は、元来、「ぶどう酒」が「発酵する」・「あわだつ」という基本的な意味をもっている^⑥。また、ウガリト語の *hmr* は、常に「ぶどう酒」という意味で用いられている^⑦。申命記32・14の *hēmer* は *dam-ēnāb* と同義であって「ぶどう酒」と訳せる。詩篇75・9の動詞 *hāmar* は、シャンプンのような「あわだつ」ぶどう酒の様子を描写している。ハバクク3・15の *hōmer māyim rabbim* は「海」(*yam*)と並行関係にあり、「海」が、「大いなる水のあわだち」あるいは、「大いなる水の碗」と表現されている^⑧。以上の例から、語根 *hmr* が本来「ぶどう酒」と関わるものであり、海の「あわだち」の様が、ぶどう酒の「あわだち」を叙述する語によって比喩的に表現されることがある点が明らかである^⑨。

もう一つの語根 *hmy* は、「しばしば」「海」と「諸国」の荒れくるる様を描写するために用いられる^⑩。しかし、詩篇46以外で、この語が「ぶどう酒」のある種の活動を記述するものとして用いられていることは注目に値する。箴言20・1は、ぶどう酒の与える影響について述べているようではあるが、それは、おそらく、あわだつぶどう酒が「立ち騒ぐ」という発酵のプロセスにおける状況のイメージが、その表現の背後に前提されているのではないだろうか。ゼカリヤ9・15も、ヘブル語本文にもとづいて、「ぶどう酒のように立ち騒ぐ」と訳すこともできよう。

以上の点から、詩篇46・4は、「立ち騒ぎ、あわだつ」ぶどう酒のイメージによって、「海」の破壊的な活動が詩的に生き生きと描写されていると想定したい。これに対して、5節では、人の心を「喜ばせる」ぶどう酒のイメージが、「川」のポジティブな活動の比喩的表現のために使用されていると思われる。

ところで、5節の「川」は、しばしば、創世記2・10のバラダイスの川とか、シロアムの流れとか、ユーフラテス川等と関連させられて論じられる。たしかに、これらの川は、5節の「川」のポジティブな働きを例示するものではあるが、いずれの川も、(人の心を)「喜ばせる」ものとして表現されていない。旧約聖書では、「川」とか「水」

が動詞「喜ばせる」の主語(行為者)として表われるのは、詩篇46以外にはない。他方、語根 *šmā* は、「ぶどう酒」

(*yayin* または *tirōs*) との関連で少なくとも五回用いられている(士師 9・13、詩 104・15、伝 10・19 — 以上、ピエル形 —、ゼカ 10・7、雅 1・4)。これらの点から、詩篇 46・5 の表現の背後には、元来、人を「喜ばせる」ぶどう酒のイメージが存在していたと想定できるのではないだろうか。

このように、4 節と 5 節との間の内容的な対立は、「海」と「川」という定型的な対語を、ぶどう酒に関わる二つのイメージとの連想によって、詩人が意図的に対比させることにより表現されている。この詩的対比の技巧によって、5 節の最初に「川」が題目として挙げられている (topicalization) のであって、「川とその流れ」という語順は不可能ではない。ここでは、「川の方は、その流れが……」と訳すことにする。

次に、5 節全体の並行法について検討する。従来は、次のように、2—3—3 という韻律パターンをもつ三行詩と理解されてきた。

nāhār palāgāw (2) [5]
yāsammehū 'ir-ēlōhīm (3) [8]
qedōš miškane 'elyōn (3) [7]

右の分析では、二行目と三行目が並行句としてよく対応しているが、第二行目が、その音節数 (5) から見ても少し短い。一行目と二行目を合わせて、計 13 シラブルと考え、詩の技巧としての不均等 (asymmetry) の現象をここに認めることも可能ではある。しかしながら、5 節を 3—2—3 という韻律パターン (シラブル数は、9—4—7) のものとして分析する方が、次の点でより適切であると思われる。まず第一に、3—2—3 という韻律パターンの三行詩が詩篇 5・9、86・12 等に見られる。第二に、詩篇 46・5a は、4a とキアスムスの関係にあることが認められる。すな

わ *4a* (Verb + Verb + Subject) // *5a* (TOPIC + Subject + Verb)、第三に、*5b* と *5c* は同格となり、ともに動詞「喜ばせる」の目的語である *hōy* が明らかとなる。この場合、左近、エンカーの解釈は非常に困難となる。

最後に、3 節後半 + 4 節と 5 節との関係を音の面から観察すると、次のような対比がみられる。(子音のみを表記する。)

- 3c) *bn̄t HRM*
d) *blb yMM*
4a) *yHM yHMR MMw*
b) *yR's HRM bg'wt*
5a) *nHR plgw ysMH*
b) *'R 'IHM*
c) *qds Mskn 'lyn*

すなわち、3c—4b では、子音 H (H・)・M・R が全体の半数を占めているのに対して、5 節では、それらのひん度が激減している。詩人は、3c—4b で、H (H・)・M・R の音によって、「海」の破壊的な諸活動、すなわち「立ち騒ぎ、あわだつ」ことを効果的に強調しているが、それとは対照的に、5 節では、「川」の流れが与える静かな喜びが描写されている。

④ 5 節との関係

- 5a) *nāhār palāgāw yāsammehū*
b) *'ir-ēlōhīm*
c) *qedōš miškane 'elyōn*

6a) 'ēlōhīm] baḡirbāh bal-timmōt

b) ya-zareha 'ēlōhīm lipnōt hōger

ヴァイスが観察するように、6節は5節で表現されている「恐れのない状況」をさらに発展させ明らかにさせている。5節で比喩的に表現されていることがら、6節では抽象的な言葉で翻訳されていると言えよう。^⑤ しかしながら、厳密には、両節の関係は、単なる「発展」と「翻訳」ということではない。6節の冒頭の「神」は、5節の冒頭にある「川」と対比されている。5節では、動詞「喜ばせる」の主語(行為者)は「川の流れ」であるが、6節では、「都」を「助けられる」主体(行為者)は「神」である。他方、「神の都」は、5節と6節を通じて、行為の受け手または対象として描写されている。すなわち、この詩篇の中心目的は、「神の都」の力あるいは栄光をたたえることにあるのではなく、そこに住み「都」を「助けられる神」(“God who helps”) “自身をたたえることである。6節において、2節で宣言された主題「神はわれらの避け所、また力」が具体的に表現されているのである。このことは、6節と2節との類似構造からも支持される。すなわち、ヴァイスがすでに指摘しているように、両者はともにその二行詩の冒頭に「神」(2aと6a)および語根 *zr* 「助ける」(2bと6b)を置いている。^⑥ さらに、「神」がキヤスマスの関係で6節の二行詩において、二度用いられている——その他の箇所は2a, 5b, 11aである——ことも、この節の重要性を支持するであろう。このように、6節は、5節の「川」の働きと対比して、「神」の臨在と助けを強調しているのであるが、5節と6節との関係は、対立としてではなく、漸層的なものと理解できるであろう。

⑤ 3—4節と5—6節と7節との関係

この詩篇の主題が「神」自身であることは、2節、6節から明らかであるが、それとともに、破壊的な力によってゆきおぼられている「山々」(3—4)や「諸国」(7)——すなわち「地」——の真中にある「神の都」の確実

性が、詩人の一大関心であったことも否定できない。鍵語である *mwt* 「揺れる」に注目することのことが明らかである。

「山々が移る」(3)

「都はゆきがなる」(6)

「諸方の王国は揺るいだ」(7)

これら、詩の構造的成り立ちを指示するものである。すなわち、5—6節は、その前の3—4節とその後の7節と対して、対立の関係にある。

⑥ 2節との節との関係

2a) 'ēlōhīm lānū mahāsēh wā'ōz (4)

b) 'ezrāh baḡarōt nimmā' (4)

8a) YHWH seḡarōt immānū (3)

b) misḡāb lānū 'ēlōhé ya'āqōb (4)

ヘンズテンベルクは、2節と8節との対応に注目して、「冒頭で言われている基本概念が、第二段落と第三段落の終り(8・12)に再び現れており、このように終りが最初の部分に再び言及している」と言っている。この対応関係は、内容的だけでなく、形式的にも確認される。すなわち、8aは2bと、8bは2aとそれぞれ遠隔並行法(distant parallelism)の関係にあるのである。

2a' 2a u8b' a ('ēlōhīm) b (lānū) C (mahāsēh wā'ōz) // c' (misḡāb) b' (lānū) A' ('ēlōhé ya'āqōb) u8b u8a u8b' a (2aと8b)の並行法を構成している。さらに注目すべき点は、各要素の最初の子音が、2aと8bにおいてキヤスマ

スの関係にあることである (Lim/m.l.)。また、8aと2bとの対応も、ヴァイスによって示唆されているが、2bの構造の分析が困難であるため、具体的な説明はなされていない。

2bの構造分析を試みる前に、8節全体の詩的構造を見ておきたい。8節は A (YHWH šebā'ōt) b (immanū) c (misgab) b' (lānū) A' (ēlohe ya'qōb) と分析できる。このでも A—b が b—A' に対応しキヤースマスになった。二行目の c に対応する要素は「万軍の主」という表現の中に含まれていると考えるか、あるいは「とりて」が “double-duty” (二重の務めをもつ) として一行目にも意味的に関わっていると考えることができよう。前者の方が、後述するように、2bとの関係でより適切であると思われる。また、8節全体は、8aの冒頭の「万軍の主」と8bの終りの「ヤコブの神」がインクルージオ (inclusio) になっており、「神」は自身が主題であることが、形式的にも強調されている。さらに immanū u lānū とは脚韻を踏んでおり、神が「われら」と具体的に関わって下がる存在であるという確信が響きわたっている。

さて、2bは、久しく *crux interpretum* であって、その解釈は伝統的に次の二つがある。

(1) nimša() を分詞ととり、「助け」を修飾すると考える。たとえば “a very present help” (RSV) を「よく近き助け」(文語訳) など。

(2) nimša() を動詞形 (カルまたはニファル) ととり、「助け」を副詞的に訳す。たとえば “as a help in trouble, he is found exceedingly.”

しかし、前者(1)の立場には統語上の難点がある。すなわち、男性形分詞 nimša() は、女性名詞 *ezrah* を修飾しない。後者(2)では、2aとの並行関係がうまく確立されない。

最近、右の伝統的な解釈とは異なる新しい提案がなされている。ヴァイスは、nimša() が「避け所」「力」「助け」といふに、主語である「神」にかかると考える。しかし、彼は、nimša() me'ōd をそのままとして訳出を試みていない。他方、ダフードは、マンラの母音をかえて、まず me'ād “from old” と読み、次に 'mā'ed “the Grand” (神の形容辞) と訳す。彼の改訳は次のとおりである。

“God for us is refuge and stronghold.”

liberator from sieges have we found the Grand.”

彼は、() へ 'elohim mā'ed という複合の神名が分割され、2節全体のインクルージオを構成していると考え。また、mā'ed と 'oz が、「位置的に」並行関係にあるが、「形式的に」は mā'ed は、最初の「神」とパラレルであると主張する。しかし、「位置的に」(positionally) と「形式的に」(formally) との区別は人為的であって説得的ではない。しかも、me'ōd の母音を読み替える試みは、非常に主観的になりやすい。mā'ed という語の存在は、ヘブル語のうちに確認されていないだけでなく、そのウガリト語との関連は、最近、マルカスによって否定されている。また、ロレットは、ダフードを批判したのちに、「避け所、また力」が「苦しむときの助け」とパラレルであることに注目し、() へ nimša() と 'elohim (「神」) が並行関係にあると考える。しかし、後者の対応は、説得力をもたない。

我々は、以上のような困難を意識しつつ、次のような提案をしたい。まず、ヘブル語の me'ōd は、ウガリト語 *me'ōd* との直接の関係いかんにかかわらず、「力」という意味をもっている (申6・5、II列王23・25)。この同じ意味を詩篇46・2bにも認めようとすれば、「力」と「助け」が2bの最後と最初において、インクルージオの働きをしていると考えることができる。すなわち、ezrah me'ōd は、本来、hendiatys であって、詩的分割の技巧によって分けられたのである。したがって次のように訳すことができよう。

「神は、我がにょいっ

避け所、力 (mahāšeh wā'ōz)

苦しむ時そこにある

助け、力 ('ezrah...mə'ōd)』

もし、2節を2—2—2—2とどう韻律パターンをもつ四行詩と考えれば、

「神は、我がにょいっ

避け所、力

苦しむ時の助け ('ezrahbəšārōl)

そこにある力 (nimšā(?) mə'ōd)』

と訳すことができる。また、「避け所、力」と「助け、力」は、ともに hendiads であるので、それぞれ「力強い避け所」と「強力な助け(手)」と訳出することが可能である。

以上の点を考慮しつつ、8aと2bの対応関係を調べてみる。本文を次に挙げると、

2b) 'ezrah bəšārōt nimšā(?) mə'ōd

8a) YHWH šəbā'ōt 'immānū

「万軍の主」の起源が何であるか、この用語は、イスラエルの民に対する「強力な助け手」(おそらく戦いにおける)とこのニモトニスを持つ。2bの nimšā(?)「援助する」は 8aの 'immānū「我がにょいっ」は、両方とも、信頼をよせる民とともにおられる神——神の臨在——のことを語っている。それゆえ、2bと8aの並行関係は、
a' ('ezrah) b (bəšārōt) c (nimšā(?)) a' (mə'ōd) // A' (YHWH šəbā'ōt) c' ('immānū) & c' a' b c a' // a'

(YHWH) b' (šəbā'ōt) c' ('immānū) と分析できるであろう。両節において、「苦しみの中での強力な助け手」としての「万軍の主」の臨在が確認され、宣言されているのである。

結論として、2aは8bに、2bは8aにそれぞれ対応し、遠隔並行法を構成しており、2節と8節は、3—7節に対してインクルージオの働きをしている、と言える。

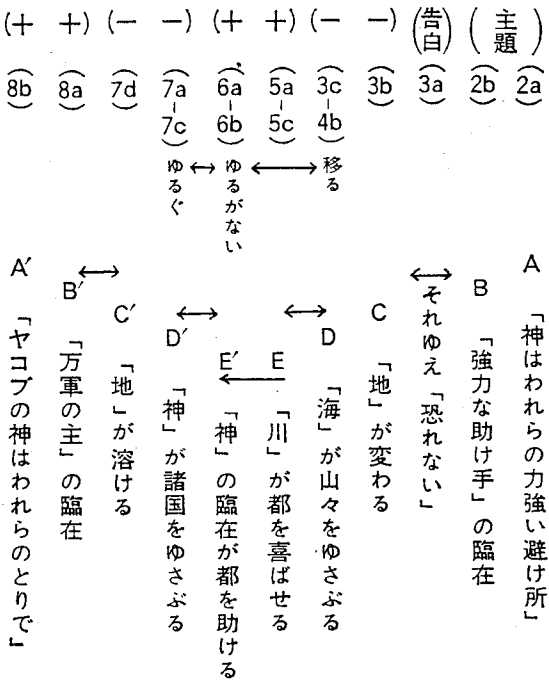
⑦ 2—8節全体の構造

今までの議論をふりかえりながら、詩篇46の前半(2—8節)の文学的構造を全体的にとらえて見ようと思う。

まず、3c—4bの統一性を内容と形式の両面から確かめた(①)あとで、3b—4bと7節全体の類似性(特に、3bと7d、3c—4bと7a—7c、さらに4節と7a—7cの対応関係)を詩的並行法に注目しつつ考察した(②)。次に(③)、3c—4bと5節との関係について、内容と形式の両面から、それらの対立現象を、破壊的な「海」とポジティブな「川」との対比、二重の「ぶどう酒」のイメージに注目すること等によって示し、5節の三行詩の構造について論じた。④では、5節と6節の間で「川」と「神」との対比がなされ、強調点が6節の「神」に自身がおかれていて、「都」そのものがここであらえられているのではない点に注目した。そして、5節と6節の関係が、対立としてでなく、漸層法としてとらえるべきであること、そして6節において、詩の主題が確認され、クライマックスに至っているという点を見た。次に(⑤)、鍵語「揺るぶ」が、3—4節、5—6節、7節にあることに注目して、5—6節が、その前後の文脈に対して対立関係にあることを確認した。⑥では、内容面から提案されていた、2節と8節の対応(類似点)が、形式面からも確かめられることを調べた。特に、2aと8b、2bと8aの対応に注目し、2bの構造について新しい解決法を提供した。

以上のことから、2—8節全体は、5—6節を中心とし、6節にクライマックスを置く、同心円的構造^⑥(concentric

ism) を持つていくと結論できるとであろう。この点を図解すれば次のようになる。



↑ 対立 (Contrast) ↓ 漸層法 (Climax)
 + / - 主題に対して積極的 / 消極的關係

注

- ① A. Alonso-Schökel, "Hermeneutical Problems of a Literary Study of the Bible," *Supplement to Vetus Testamentum* 28 (1975), p. 13.
- ② *Ibid.*, p. 14. その他「*「やへ熱きわれしうなる諸前提を明確にするは」*」を「注解書にならば個々の形態はあつて注意を払ふべき」よな提議を述べらる。
- ③ 関根正雄『詩篇註解(上)』『教文館』一九七一年、一九二頁。
- ④ 本論文において、聖書の訳語は、特に指摘しなから「新改訳」聖書に従っている。詩篇の注解書は、著者名と出版年のみを注で記すことにする。
- ⑤ Duhm (1922), Oesterly (1939), Kissane (1953), Weiser (ET: 1962), Anderson (1972) etc. 最近の *Jerusalem Bible* は、聖句や本文など復元して記している。小林和夫『新聖書註解』旧約(9) の序文を参照せよ。
- ⑥ Kirkpatrick (1951), Maclaren (1903), etc.
- ⑦ KJV, RSV, Briggs (1906). 新改訳、新改訳。
- ⑧ Hupfeld, Ewald (cf. Delitzsch, p. 94). Maclaren.
- ⑨ Hengstenberg, Delitzsch, Kirkpatrick. 國華。
- ⑩ Maclaren.
- ⑪ シムオンが回鑑じ、神の絶頂に「万軍の主はわれらのとりて……」をいふ所はなほ驚くべきことである。Fleming James, *Thirty Psalmists* (New York, 1938), p. 64.
- ⑫ Kittel (1922). シムオンが回鑑の巨龍を哀れに哀れに記している。
- ⑬ Meir Weiss, "Wege der neuen Dichtungswissenschaft in ihrer anwendung auf die Psalmenforschung: Methodologische Bemerkungen, dargelegt am Beispiel von Psalm XLVI," *Biblica* 42 (1961), pp. 255-302. 特三二六頁以下。

- ⑭ H. Junker, "Der Strom, dessen Arme die Stadt Gottes erfreuen (Ps. 46, 5)," *Biblica* 43 (1962), 197-201. 邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ⑮ P. Leo Krinetzki, "Der anthologische Stil des 46. Psalms und seine Bedeutung für die Datierungsfrage," *Münchener Theologische Zeitschrift* 12 (1961), p. 54. 邦訳「二七三頁以下」、『聖書研究』大崎善三編、二〇一〇年、二七三頁。
- ⑯ John Goldingay, "Repetition and Variation in the Psalms," *Jewish Quarterly Review* 68 (1978), p. 150.
- ⑰ Dahood (1965).
- ⑱ *yammīm* 𐤎𐤍 文法上の複数形に於ける——"plural of amplification" (Gesenius · Kautzsch, §132/N)——に於て、再数語に於けるに於て、*yammīm* 𐤎𐤍 又は *nāhār* 𐤍𐤏𐤔 又は *šānān* 𐤑𐤍𐤏 又は *mēmāw* 𐤍𐤌𐤍 又は *hōmēr* 𐤁𐤓𐤍 (hyponymous) 關係に於ける。
- ⑲ *yammīm* 𐤎𐤍 は、4節と7節が共に「立ち騒ぐ」で始まるのゆゑ、4—6節と7節とを、6節の「喧嘩」に接する二語組の「驚き」をみなす。カヌーの段落構成は、左近、二九五頁以下に於けるものと異なる。
- ⑳ G.B. Gray, *The Forms of Hebrew Poetry* (New York, 1915, 1972), p. 163f.
- ㉑ 「新約聖書」の七十語を以て、「神の御名を讃め奉るべき」と、聖書を以て「神の御名」を以てしる。
- ㉒ Weiss, p. 291.
- ㉓ 後半に於て、三回 (6・9・13節) 表れる。
- ㉔ J.V. Kinnier Wilson, "The Karba'il Statue of Shalmaneser III," *Iraq* 24 (1962), p. 93, 95.
- ㉕ Cyrus H. Gordon, *Ugaritic Textbook* (Rome, 1965), Text 51:V:70.
- ㉖ *𐤎𐤍𐤍𐤍 yammīm* の場合と同様に、複数形を用いるに於ける。
- ㉗ *𐤎𐤍𐤍𐤍 (Ab//a'b'e)* は、*𐤎𐤍𐤍𐤍* の、4つの語の並列。
- ㉘ *yehēmū yehmarū* 𐤎𐤎𐤍𐤍 𐤎𐤎𐤍𐤍 *𐤎𐤎𐤍𐤍* の、*𐤎𐤎𐤍𐤍* と *𐤎𐤎𐤍𐤍* の並列。cf. Immanuel M. Casanowicz, "Paronomasia in the Old Testament," *Journal of Biblical Literature* 12 (1893), pp. 105-167, esp. p. 132.
- ㉙ Cyrus H. Gordon, *Ugaritic Textbook*, § 13. 116.

- ⑳ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の、*𐤎𐤎𐤍𐤍* の動詞を以てしる。4節の動詞を以てしる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉑ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「新約聖書」(parallel word pair) に於ける。William R. Walters, *Formula Criticism and the Poetry of the Old Testament*. Berlin, 1976; Mitchell Dahood in *Ras Shamra Parallels* Vol. I (1972) & Vol. II (1975) 参照。
- ㉒ "The Votive Particle *𐤎𐤎* and the Poetic Structure of Proverb 31:4," *Annual of the Japanese Biblical Institute* 4 (1978), p. 26, also p. 30, no. 34 参照。
- ㉓ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉔ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉕ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉖ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉗ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉘ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉙ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉚ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉛ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉜ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉝ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉞ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㉟ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊱ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊲ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊳ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊴ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊵ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊶ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊷ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊸ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊹ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊺ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊻ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊼ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊽ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊾ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。
- ㊿ *𐤎𐤎𐤍𐤍* の「驚き」の中心となる。邦訳集『詩篇研究』新教出版社、一九七一年、二九三頁以上。

- ㉞ 1) の型に 連句の型「*かぶる顔面*」を模倣した例がある。Cyrus H. Gordon, "The Wine-dark Sea," *Journal of Near Eastern Studies* 37 (1978), pp. 51-52. ㉞ 参照せよ。
- ㉟ G.J. Botterweck & H. Ringgren (eds.), *Theological Dictionary of the Old Testament* (Grand Rapids, 1978), Vol. III, p. 416.
- ㊱ Weiser, Kraus (1978), Delitzsch, Hengstenberg, Anderson, etc.
- ㊲ Briggs; Kirkpatrick; Lloyd Neve, "The Common Use of Tradition by the Author of Ps. 46 and Isaiah," *Expository Times* 86 (1974/75), p. 244, etc.
- ㊳ Junker, p. 200.
- ㊴ *תַּדְדִּוּוֹ* casus pendense ヲレフ。Krinetzki, p. 54 ㊴ 参照せよ。
- ㊵ Weiss, p. 286 f.
- ㊶ Weiss, p. 288.
- ㊷ 1) の型に *תַּתְּוֹמֵימָה* の型を模倣した例がある。Weiss, p. 293.
- ㊸ 連句の型に *תַּתְּוֹמֵימָה* の型を模倣した例がある。Weiss, p. 293.
- ㊹ Weiss, p. 293.
- ㊺ *דָּבָדָב* "double-duty" substantive *דָּבָדָב* Mitchell Dahood & Tadeusz Penar, "The Grammar of the Psalter," in Dahood, *Psalms III* (1970), p. 435. ㊺ 参照せよ。
- ㊻ Weiser, Kirkpatrick, Battenwieser (1938), Plumer (1867) etc.
- ㊼ Weiser, Hengstenberg, Briggs, Delitzsch, Kissane, etc.
- ㊽ Kraus, Hengstenberg, Briggs, Delitzsch, Kissane, etc.
- ㊾ Weiss, p. 271 f.
- ㊿ Dahood, *Psalms I* (1965), p. 277 f.
- 100 Dahood, *Psalms III* (1970), p. xxvi, 318.
- 101 Dahood in *Ras Shamra Parallels*, Vol. I, p. 292.
- 102 David Marcus, "Ugaritic Evidence for 'The Almighty' / 'The Grand One?'," *Biblica* 55 (1974), pp. 404-407.

- 103 O. Loretz, "Die Umpunktierung von *m'd* zu *mā'id* in den Psalmen," *Ugarit Forschungen* 6 (1974), p. 482.
- 104 1) の型に *תַּתְּוֹמֵימָה* (Break-up) の型を模倣した例がある。E.Z. Melamed, "Break-up of Stereotype Phrase as an Artistic Device in Biblical Poetry," *Scripta Hierosolymitana* 8 (1961), pp. 115-153. ㊴ 参照せよ。2) の型に "Broken Construct Chain" の型の型に *תַּתְּוֹמֵימָה* の型を模倣した例がある。Cf. David Noel Freedman, "The Broken Construct Chain," *Biblica* 53 (1972), pp. 534-6; A.C.M. Blommerde, "The Broken Construct Chain, Further Examples," *Biblica*, 55 (1974), pp. 549-552.
- 105 語順の倒置は、詩的分割と文体的特徴の関係を考察せよ。
- 106 キヤヌタスの複雑な構造の同一性の構造を考察せよ。Francis I. Andersen, *The Sentence in Biblical Hebrew*. The Hague, 1974. 第九章を参照せよ。なお、同一性の構造を、詩篇全体の構造理解を考察せよ。すなわち別の所を詳論する予定がある。

(筑波大学専任講師、聖書神学舎教師)